

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-5

【二つのラプソディ】は17分の演奏を終えていた。真紀がこんなにもBGMを意識したのは初めてのことだった。ブラームスの後には、聞き覚えのあるシャンソンがジャズギター風の演奏で流れてきた。真紀はギタリストの『ジャンゴ・ラインハルト』を知らなかったが、ありがたいことに心身の疲弊はラウンジの選曲に救われていた。

だだっ広い空間で沈黙を保つのは容易ではなかったけれど、真紀は朝倉の次の言葉を待っていた。

携帯電話を閉じた朝倉は、何を思ったのか傍らのカバンからノートパソコンを取り出して、小さく息を吐くと眉間にしわを寄せてキーボードを静かに叩き始めた。

「何度見ても素晴らしい！」

朝倉はディスプレイの裸婦像と目の前にいる真紀とを見比べながらニンマリする。

「提案させていただいた絵です。ご覧になりますか？」

今度の目論見が間違いなかったことを、絵画のモデルを前に切り札を出すかのごとく、見てくれるのが当然とばかりにパソコンの向きを変えようとした。

「やめてください。協力すると申し上げたはずです」

ハリウッド映画だったら、ここでワインでも相手の顔にぶっ掛けて立ち去るシーンになるかもしれないが、真紀は同様の気分を何とか抑えて辛抱強く言った。

機先を制された画商は、きまり悪そうに視線をディスプレイに泳がせた。

「個展のポイントを、かいつまんで話してください」

悔しさと悲しみとがない交ぜになって、すぐにでもこの場を立ち去りたがったが、真紀の人の良さがそれを押しとどめていた。

「僕は呼んでいませんからね……」

朝倉は真紀の肩越しの先に、こちらに歩いてくる横田を認めると、慌てて弁明した。

今何が起きているのか、直ぐに察知した真紀は、背筋に悪寒が走って振り返ることすらできずにいた。

別段悪びれた風もない横田は、二人が蜜月の頃、よく待ち合わせ場所として利用した『帝国ホテル本館中二階オールドインペリアルバー』と同様に、真紀の前にふわりと対座した。

「……」「……」

男と女は無言のまま向き合っていた。

女は男の風貌も心も、以前と変わっていないと思っていた。